ニュースレター
かけはし
vol. 19
2014年2月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

目次

寄稿: アイスホッケーとサーフィンと研究 1-2
(木田 新一郎)
特集: 自分のラボを通してみるアメリカ留学 3-4
(UC Davis Plant Biology Group)
寄稿: 一番難しそうだけど、一番面白そうな事がしたい 5-6
(関口 雄介)
連載: 留学後記(3) 英語の話 7-8
(橋本 道尚)
わが街・学科紹介: 公衆衛生学修士プログラムとエモリー大学 9-10
(塩田 佳代子)

寄稿: アイスホッケーとサーフィンと研究

海洋研究開発機構(JAMSTEC)
木田 新一郎

大学院生活がスタートする直前の夏休み、私は帆船にのって大西洋上にいました。これから海洋学を学ぶことになる新入生といっしょにまずは海を実体験、というわけです。学科からそんな豪勢な入学記念イベントが用意されていることにはとても驚きましたが、それ以上に驚いたのは船上で新入生の一人に「海を見るのが人生で二回目なんだ」といわれたことでした。この人はいったい何を血迷って海洋学を選んだのだろうかと。私が驚いている様子を見てさらに「一回目は合格通知をもらったあとに学校訪問をしたときだ」と教えてくれました。つまりこの人は受験段階では海を見たことがなかったのです。だったらなぜ海洋学を選んだのかと尋ねてみると、学部生のとき大学のセミナーに来た海洋学者の話が面白かったから大学院で受けるだけ受けてみたというのです。日本人ならほとんどの人が一度は海を見たことがあると思いますが、この人はアメリカの内陸部出身だったのでテレビでしか見たことなかったといわれました。

> よくよく考えてみれば宇宙に行ったこともないのに宇宙を勉強するわけで、こんなのもありなんだな。なんか受験、志望、とか考えまくるのもいいけど別にこれでもいいんだよなって思いました。

海を2回しか見ていないこの人の興味が大学院に入ったこれからどんどん広がっていくことを想像すると、自分は「やりたいこと」を考えすぎていたのではないかと、なんか小さく感じたものです。

アイスホッケーをしてみた

大学院生活は、徹底的に絞られる日々の連続でした。そんなとき、息抜きになるのが学内イベントです。私が住んでいたボストンは寒いこともあって冬はアイスホッケーリーグが開かれていました。大学院二年目の冬に学科の友人からアイスホッケーのチームに誘われ、「滑れないよ」って答えたら「滑れなくていいから。立ってればいいから」といわれたので、だったら、ということで試合に参加することになりました。宣言通り私は全く滑れず、正直立っていることさえも精一杯の状況でした。パックが自分の方に近づいてきたら打ちたくなるものの、いざ打とうとすると空振りしてバランスを崩してこけてしまいます。パックは私が必死に打とうとしたことをまったく気づいてくれないのです。でもこれが私だけかといったら、参加している人のほとんどがこういう状況でした。それでも試合が成り立つのが不思議、そしてそれがなんと楽しいこと。観客もプレーヤーが見事にコケたときほど大笑いして喜んでくれます。このアイスホッケーというかコケ合戦は、大学に初心者リーグが用意されていたおかげで存在していました。二本足では滑れなくてホッケ

大西洋を航海する帆船の上で。

ースティックをつかってなんとか滑っている姿からTRIPOD（三脚）リーグとも呼ばれており、アイスホッケーの上手な人たちが、せっかくボストンにいるんだから、という趣旨のもと開催していました。

ボストンの仲間とアイスホッケーをする様子。

参加する人のほとんどがホッケー初心者で、上手に滑れると「上のリーグでやってください」といわれます。このあとアイスホッケーには結構ハマりまして、翌年は友人と自分たちのチームを作って参加して下手くそからソコソコになるときの上昇曲線をたっぷりと楽しみました。このチームの仲間とはいまでも仲良くしています。

サーフィンと研究生活

さて、Ph.Dを取るとさっさと大学から追い出されます。卒業後そのまま大学に残ってはならない、というルールが私の大学院プログラムにはありました。人の移動を促すためのルールです。多くの人はまずポスドクになったのですが、ポスドクにもプロジェクト雇いとフェローシップ雇いの二種類あります。ただ研究テーマには流行りがある以上、自分の興味に沿ったプロジェクトが自分に好ましいタイミングでやってくるわけではありません。タイミングよくポスドクを見つける人もいれば、大学院中に仲良くなった他大学の先生とプロジェクトを立ち上げてその資金でポスドクになる人もいます。私は幸いにもフェローシップを獲得でき、ハワイにいくことになりました。

ハワイではサーフィンをしよう、なんて気楽に考えていたのですが、実際はボストンとの学風の差に戸惑いました。週末も大学に出てきていたボストンの人たちに比べ、ハワイの人たちは平日でもいい波がきたらサーフィンに行きます。まぁそれだけだったらいいのですが、研究でこれまで面白いと思っていたことにはあまり興味を持たれず、どちらかというとボストンではあまり興味を持たれなかったことをハワイでは面白い面白いといって研究していました。こうまで違うものかと。でも風土が変われば面白いと感じるものが変わるのはごく自然なことなのかもしれません。これはとても勉強になりました。私は海水が世界中をどう流れているのか、ということを研究しています。船が必須アイテムな学問なので必然的に海の近くに大きな研究機関が存在し、ハワイも地理的に明らかなように太平洋に関わる研究の中心的な役割を担っていました。このことは、私にもう1つのメリットをもたらしてくれました。太平洋の逆側にある日本とのつながりが強かったのです。おかげでハワイに訪れる日本の人から大学や研究所の話を聞くことが出来ました。

そして日本へ

大学院生活を研究機関で過ごしたせいか、私は就職するなら大学より研究機関かな、とぼんやり考えていました。世の中は、就職する人としない人に大別できると思いますが、研究者として就職先を考えた場合、大学、公的研究所、民間研究所の三択になると思います。私はどの国で、というより多種多様な海洋学者に囲まれる研究所で働きたいと思っていました。私がハワイに居た頃、アメリカのほとんどの研究機関は予算減の大嵐が吹き荒れ始めており、その研究環境は厳しい状況でした。だったら他国に行くのも選択肢のひとつで、私の友人の多くもそうしました。私はアメリカほどの嵐が吹いていなかった日本になりました。帰国して以来、よくアメリカとの違いを聞かれるのですが、正直なところ私が大学院で在籍していたのはアメリカ最大の海洋研究機関にもかかわらず「民間」の研究所、という特異的な場所だったのでなんとも比較しようがない。どちらかというと民と公の差を大きく感じています。あえていうならアメリカのほうが研究者・グループ間の垣根が低く他人の研究への興味が強く、日本のほうが研究資金の乱高下が少なく（資金が潤沢なわけではありませんが）研究環境が安定している気がします。でもこれはコインの裏表の要素が少しあり、何がいいかは一人一人の好みとスタイルによるところが大きいと思います。

やってみたらおもしろかったって経験は多かれ少なかれみんなあると思います。留学というとなんか一大イベントのように聞こえるかもしれませんが、所詮入学する大学がたまたま海外にあるだけです。大学側からみれば多々いる海外から来る学生の一人に過ぎないということは、留学という行為がなんら特別な行為ではないということでもあります。自分で勝手にハードルを上げることなく、行きたいと思ったら試してみてください。だって海外への架け橋はもうとっくに出来ているんですから。

木田 新一郎
独立行政法人・海洋研究開発機構
地球シミュレータセンター

PhD, Massachusetts Institute of Technology–Woods Hole Oceanographic Institution Joint Program

特集:自分のラボを通して見るアメリカ留学

University of California Davis
辻井 快

韓国、中国、パキスタン、イラン、チリ、そして日本。私の研究室はこれまで教授以外は全て海外からの学生でした。そこに今年、地元カリフォルニアからのメンバーが加わり研究室がさらに国際色豊かになりました。「かけはし」ではこれまで日本人がなぜ海外、特にアメリカ留学を志したか、あるいは実際の経験からアメリカ留学にどのようなメリット／デメリットがあったかなど、日本人の視点からの留学に重点を置いて編集してきました。しかし、あえてこのコラムではその視点を少し変え、多様なバックグラウンドを持つ私の研究室のメンバーがそれぞれ違う国からがなぜアメリカ留学を志したのかをまとめてみました。

韓国人ながらアメリカ生まれで英語も流暢なダニエルさん、最近浙江大学で博士号を取得した生まれも育ちも中国の晶(ジン)さん、チリから来てまだ一年程のハビエルさん、そして地元カリフォルニアの大学から今年大学院に進学して来たトラビスさん。皆さんそれぞれの視点からなぜアメリカの大学院に来ることを選んだのか書いてもらいました。他の国の学生がアメリカ留学というものをどう考えているのか、日本の留学を志す方々の参考になればと思います。

In Korea, reputations and appearances carry much weight, due in some capacity to the prevalent confucianist mindset that has been in our society for the last 700 years. As in Japan, tradition is also a mainstay of our culture as well. Following the Japanese occupation and the Korean War, as much of South Korea's infrastructure laid in ruins, many of the nation's brightest turned to the United States and other developed countries to further their educations. While no longer necessarily true, the impression that advanced degrees from developed foreign countries carries more prestige still pervades Korean society, and it is still nigh impossible to secure a faculty position at a well-known university without such credentials. Therefore students interested in getting advanced degrees, especially in the sciences, and subsequently working in academia (i.e., everyone) try to complete at least part of their higher education abroad, and I was no exception. Of course, there are other, more 'politically correct' reasons for studying abroad in the United States, such as the chance to broaden one's horizons, meet new people, to get a better education at world class universities and to improve one's English. However in an age where top Korean universities such as Seoul National University not only rank among the best in the world, but attract many international students as well, these arguments lack, shall we say, a certain degree of conviction. While there are undoubtedly still many personal and practical reasons to pursue a Ph.D. abroad, the main force driving prospective Korean professors across the Pacific is job security.

Daniel Park
PhD student from Korea

My name is Jing Liu and I got my Ph.D. degree from Zhejiang University in June 2013. I was born in China and finished my elementary, junior high, high school and college all in China. I liked staying in China because all my family and friends were there. However, as soon as I entered graduate school, I realized how important it is to have experience working overseas as a Ph. D. candidate. Most significantly, universities and international companies prefer people with overseas experience when they look for employees. Therefore, I was determined to work in a major university in the United States before I graduated. In Zhejiang University, different types of funding sponsored by the government or the university, are available that give students the opportunity to work in foreign universities or institutes. I was fortunate to be funded on my fourth-year to go and work at UC Davis for seven months.

Life in the United States was quite different from what I had in China, which gave me a wider vision on my life and work. First of all, I had a chance to work in a totally different atmosphere with people from different countries. My mentor was American and my lab mates were from the United States, Singapore, Korea and Japan. They helped me out a lot when I was there, not only on my project, but also on my English. My English improved a lot when I put myself in to an English-speaking environment. I also got to take part in some seminars given by students from different labs. This gave me knowledge beyond my specific research area let alone it was a great opportunity for me to meet new people. In one seminar I even met a professor who used to work in my college. We have not seen each other for seven years!

In addition, there were many places in the United States that I have always wanted to visit:cities, museums, national parks and so on. Off course, the United States is also where they have schools of one's dream such as Harvard, MIT, or Cal-tech. Visiting those universities made me understand the American culture and history better.

Leaving home and being a half way around the world for such a long time made me miss my family more than ever. but I really enjoyed the seven months in the United States because it provided an unseen world to me.

Jing Liu, PhD
researcher from China

My undergraduate curriculum in Chile focused on conventional agricultural production. As students, we only focused on learning how to support the most efficient and effective way of agricultural production; and the opportunity to explore other areas of study was limited. Despite the reduced options of specialized studies and/or opportunity for doing research, I continued to pursue my passion in scientific study of plants instead of what I was instructed to follow as an undergraduate student. Therefore, I applied to a scholarship in Chile to study in a graduate program abroad.

Here in Davis, I started meeting professors and students in an area unknown for me at that time. They were exploring the diversity of plants and its functions in the ecosystem. Having been interested in the diversity and its interactions with the environment of plants my self, I decided to specialize in plant systematics, evolution and plant eco-physiology, which is an area less explored in my country.
I also value the enjoyable time that I am having as a graduate student in Davis. The atmosphere in Davis fits well with my previous expectations and lifestyle. Besides, my research in the phylogeny in the members of the Rose family lets work out in nature both in my country and California. I am hoping that this can improve the scientific knowledge for both countries. Through work and personal communication I have come to the conclusion that the source of knowledge that I'm seeking is here in Davis, and this reinforces my decision to pursue further studies in the United States.

My main objective after completing my studies is to go back to my country and teach in the academia, either in a Chilean research center or at a university. I would like to educate students and others in the areas of my expertise. I believe this would be the best way to educate future generations of students and anyone interested. Personally, I am the first person in my family that ever had the opportunity to attend university. I deeply value the contributions and efforts of my family in helping me to receive a quality education. I therefore want to share my experiences with my community and future generations through teaching.

Finally, I'm proud of starting an independent life in another country. This 'new home' that I have settled in (Davis, USA) has broaden my cultural understanding through active participation and deepen my intellectual understanding of the interactions between an individual, society and the natural world.

Javier Jauregui Lazo
MS student from Chile

California, a state teeming with state of the art research opportunities and world-class universities, is a place I feel lucky to call home. Like much of the United States, it is an excellent place to pursue graduate education in an international and competitive atmosphere.

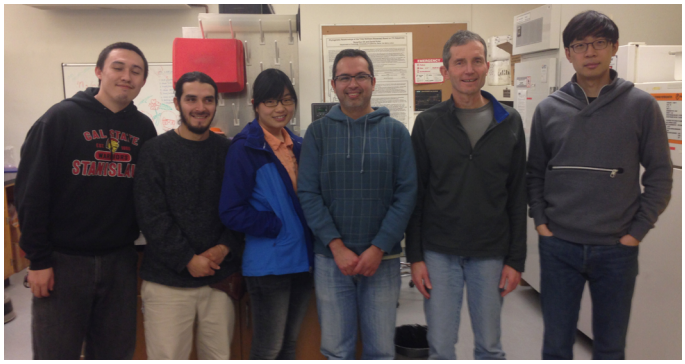
My reasons to pursue graduate education in the United States were fairly simple. First, the academic environment at most universities is comprised of top minds from around the globe. In my first few weeks of graduate school, I immediately met professors not only from the U.S, but also from Latin America, Europe, Africa, and across Asia. The student body also has a substantial international component, and in the lab that I work with most closely, I am the only student that has lived most of their life in the US. Others have spent a substantial fraction of their lives in countries as diverse as Chile, Pakistan, China, Korea, and Japan. Many universities in this country seem as though they are located in international territory, where all populations are represented and bring unique contributions.

A second reason I chose to study in the U.S. was the wealth of options in choosing a university. No matter what your academic interest might be, the United States probably has at least one, if not several, top-level programs in that area. Three of the four Ph.D programs that I applied to were in the state of California alone, although the University of Wisconsin had such a strong program for Plant Sciences that I couldn't resist applying.

Despite the advantages to furthering your education in the United States, it is important to consider how you will adapt to living a long distance from friends and family. In the end, one of the reasons I decided against attending the University of Wisconsin (which is more than 2000 miles from my hometown) was the distance. Every student has to weigh their personal and professional goals for themselves.

Today we live in an increasingly globalized world, and students today have a multitude of options for where they can study. Like the international students I work with each day, I am glad I chose to pursue my graduate education in the United States.

Travis Parker
PhD student from the US



ラボの集合写真。左から、日本代表の辻井、チリ代表ハビエルさん、中国代表ホアジェンさん、コロンビア代表ホルヘさん、アメリカ代表ポッター教授、韓国代表ダニエルさん。

寄稿: 一番難しそうだけど、一番面白そうな事がしたい

京都大学大学院 医学系研究科
関口 雄介

はじめに

関口と申します、縁があり今回の米国大学院学生会のニュースレターを書く機会を頂いたものの、実は私アメリカへは一度も行った事がありません。イギリスへ留学してヨーロッパ圏でちょろちょろしつつ、アメリカにも是非行きたいなと憧れ続けた3年間でしたが、結局機会は無く過ぎました。そんな事もあり、アメリカで研究に励み活躍する方々の面白い話をいつもこのニュースレターで拝見する度、自分も頑張ろうと気合いが入っていました。

さて、今回はそんな憧れのアメリカの話ではなく、私のイギリスでの研究生活をご紹介させていただこうと思います。私にとってとても新鮮で困難で有意義で大変で楽しくて苦労した3年間でしたが、自分なりに感じたイギリスの雰囲気をお伝えできたら幸いです。たまにはヨーロッパの島国の話でもいかがでしょうか?

なんでイギリス?

2010年に大阪府立大学の修士過程に在籍していた頃、3ヶ月間ケンブリッジ大学へ留学する機会に恵まれ、そこでの経験が契機となってイギリスのPh.Dコースへ進む事を決めました。その3ヶ月間で私は大きく2つの事を感じたました。一つは最先端での研究現場の面白さ。もう一つは自分の英語力やコミュニケーション能力の未熟さです。このままでは日本でPh.Dを取っても、将来研究者として世界で勝負していく事は出来ないと痛感しました。それならば、むしろPh.Dから海外で始めてしまえばいいではないかと考えました。学ぶ事が学生の本分ですし、恥をいくらかいても構わない、周りに鬱陶しがられても構わない、馬鹿にされても構わない、ゼロからスタートする気持ちで知りたい事をやりたい事を全力で体当たりで学びに行ってみるのも面白そうでした。

その時に頭に浮かんだ所がImperial College London大学の中にあるMembrane Protein Laboratoryと呼ばれる研究室です。僕の研究分野は「タンパク質の構造解析」というものです。生物の部品であるタンパク質がどんな形をして、どうやって機能しているのかを原子レベルで解明し、生命現象の理解や病気の治療へと役立てる事を目的とします。その中でも難易度・注目度が高いターゲットが膜タンパク質というものでした、まだまだ研究に必要な技術や知識が発展途上の中で世界中の研究室、企業が切磋琢磨している現状でした。運も大きく関わってくるので3、4年で満足いく結果を出す事は難しいテーマですが、学会や論文で知れば知るほど自分でも触れてみたいという気持ちが強くなっていました。そんな中で先の留学での契機が訪れたので、どうせ海外でPh.D取るなら世界でトップレベルの研究所でやれば良いじゃないかと考えて決めたのがImperial College LondonのMembrane Protein Laboratoryでした。多くの結果を出していて設備やスタッフのレベルが高く、膜タンパク質を始めるならここはうってつけの場所でした。

難しいし、楽しい

注目度が高いターゲットであるという事はメリットもデメリットもあります。メリットで言えば、まず日々最先端の研究技術が更新されていく事が挙げられます。大学から企業まで数多くの研究者が新たな方法を開発し、一つの分野だけでなく他分野からも様々なアプローチでの研究が進められています。そんな中、毎月毎週の様に新しい結果が報告されるので楽しくてしょうがないです。こういった進歩をリアルタイムで見聞きして、状況によっては自分の研究へ取り入れていく事で高難易度の目標達成を目指していきます。

一方、デメリットで言えば、まずは高難易度であるがために研究成果が出にくい事があります。一般的に3年間ですべて満足のいく結果を出すためにはよほど運が良くなければ難しく、私もPh.Dの間は一通りの実験手法を学ぶ訓練の場と考えて始めました。もう一つのデメリットは競争の激しさにつきます。自分のやっている研究はもれなく世界の他のラボでも研究が進行中であったりします。私自身もPh.Dコースの2年目に他のラボが実験に成功したとの情報が入ってきて改めてこの業界の厳しさを実感しました。ほんの数ヶ月の差で負けてしまいビッグジャーナルを逃してしまう事は良く聞く話です。

この様に注目度の高いターゲットは競争が激しく、研究も盛り上がります。リスクもありますが、自分もこの競争に加わって結果を出してやろうという気持ちで楽しく研究ができます。

イギリスの研究室の仲間たちと。

どこか穏やかな生活

イギリスの大学と言えばまず頭に浮かぶのはケンブリッジとオックスフォードでしょうか。どちらも長い歴史を持ち、街と大学が混ざり合った独特の雰囲気があります。特にケンブリッジは街そのものがそれほど大きくなく、カレッジの占める割合も大きいです。カ

フェや食堂に行けば学生や研究者らしき人々も多く見受けられます。広い公園も多くテムズ川や植物園など街中を散歩していると気持ちがいいです。一方、Imperial College Londonは日本では知名度は低いですが世界的にもレベルは高いの大学です。ロンドン中心部にある事もあり近代的なビルで構成されるキャンパスです。ハイドパークと科学博物館に挟まれた場所にあり、観光や買い物はもちろんイベントも多いので飽きない所です。

また、曇りの日が年中続く気温も低いイギリスですが、春夏の暖かい時期にたまの晴れ日が来ると皆こぞって外に出て、芝生の上で昼食やひなたぼっこを楽しんでいます。留学して始めてお日様のありがたみを認識しました。話は変わりますが、もう一つイギリスに惹かれた理由があります。パブです。いわゆるイギリスの居酒屋ですが、全般的に店内はやや薄暗く、自然と落ち着く雰囲気の中で何百種類とあるエールを飲みつつ、気が向けばFish&Chipsを頼むのもよし（写真参照）。のんびり会話を楽しむ事が出来るいい場所です。

イギリスのパブでの代表的な料理Fish & Chips。白身魚のフライ＆フライドポテトの組み合わせ。イギリス国旗が飾ってある。

ここが違う

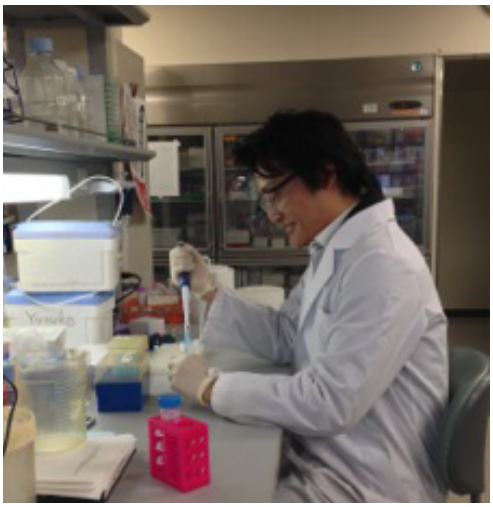
指導教員や周りの研究者を見てまず感じる事はまずコミュニケーションの違いでした。ラボの中はもちろん、研究所の他のグループや外部の人々とのつながりが広く、ちょっとした日常会話から研究上のディスカッションまで内容は様々ですが情報の伝達が早いなと感じます。研究面に関してこれはとても重要な事だと感じます、論文になる前のデータやちょっとした実験のコツ、各地の学会やシンポジウムでの情報などが手に入る事は研究のスピードに大きく関わります。競争の激しい分野ではこの差は致命的になるのではないでしょうか。

日常で言えば気になる所はティータイムです、午前と午後に1回ずつラボの人たちがちらほらと集まって皆でお茶の時間が始まり、世間話や研究の話などをします。留学の最初の頃は世間話の英語についていく事ができなかったものでした、研究の単語などと違い知らない単語や言い回しに慣れるのにいい勉強になりました。特にジョークなんかは今でも分からない事が多いです。これはいい気分転換になりますし、日々の皆との会話もグループの雰囲気が良くなる様に感じます。こういう些細な事が実は大切なのかもしれませんね。

最後に

3年間でなんだかんだと色々な所で研究する機会がありました。私の指導教官の一人は途中でイギリスからスウェーデンのストックホルム大学へ移り周りのグループと協力しながら研究を進めています。私も研究に必要な技術を学びに冬と春に2度滞在しました。冬は連日大雪でどこもかしこも真っ白でしたが、春先は暖かくて気分も上々です。なぜか街中にはやたらと寿司屋が沢山あるのも面白かったですが。その他にはフランスやドイツなどにも実験や勉強に訪れる機会がありましたが、ヨーロッパ圏だと時間や費用もそれほど必要ではないため気軽に行く事が出来ます。多くの場所へ足を運び、様々な人と出会い、沢山の事を学ぶ事が出来た留学生活でした。特に環境が変わる事が自分にとってはとても楽しかったです。

今私は京都で研究員として働き始めましたが、以前は日本へは戻らずそのまま海外で研究を続けて行きたいと考えていました。海外のラボの方が自分にとってストレスも少なく、変化に富む刺激の多い環境は飽きる事なくモチベーションを高く持ち続ける事が出来ると感じていたからです。基本的にはその考えは今でも変わっていないのですが、日本はやはりレベルの高い研究が行われています。それはとても魅力的で面白い事です。今後はイギリスで培った経験を活かして、海外との積極的な協力関係を結びながらプロジェクトを進めて「楽しく」研究できる様に頑張っていきます。待望のアメリカとの共同研究もありワクワクしています。



関口 雄介
京都大学大学院　医学系研究科

2010年-2013年：PhD, Imperial College London(イギリス)
2013年～：京都大学にて研究員
Stanford大学との共同研究を担当中

連載: 留学後記 (3) 英語の話

Consultant, Petroleum Industry
橋本 道尚

2月からサウジアラビアに来ています。10年住んだアメリカのボストンを離れてから4カ国目での仕事です。 今いる組織はサウジアラビア国営の会社にも関わらず、公用語がアラビア語ではなく英語です。少し前に日本の大手のe-commerceの会社が公用語を英語にするとニュースになりましたが、実際にそういう環境に外国人として(つまり、公用語が英語であることの便益を享受する立場で)身を置くのは面白いものです。私が関わるレベルでは社内メールは全て英語ですし、契約書や事務書類なども全て英語です。社内のコミュニケーションについては、外国人同士は英語が主で、現地人同士ではアラビア語でやり取りしていますが、外国人が入ると英語になります。雰囲気としては、アメリカにいる外国人留学生が、自国人同士では自国語を話して、誰か外国人がグループにいたら英語で話すのと同じです。この会社に限れば、顧客の多くは国外にいるのでしょうし、研究所の業務に限っても研究者の多くを外国から誘致している現状で、理にかなっているように思います。私としても難解なアラビア語を学ばなくても職を得られたのは有り難いことだ、とも考えられます。居心地は悪くありません。

少し前置きが長くなりましたが、今回は「英語」についての所感を書きたいと思います。 米国大学院学生会の留学説明会では、留学したらどれくらい英語を話せるようになるのか、行く前にどれくらい準備が必要か、どうやって英語の準備をしたら良いのか、などの質問をよく受けますので、やはり多くの学生さんにとって興味のあるトピックなのだとは思います。その都度何かを答えているのですが、実は私は何を話せば質問者の役に立つのかよくわかっていません。いずれにしても、日本育ちの私が、現在は自分の仕事で英語を使用できるくらいにはなりましたので、まずはこれまでの経緯を説明するところから始めます。

私は0歳から18歳まで日本に住んで、18歳から32歳までアメリカに住みました。18歳までは、識者先生方の批判にさらされている日本の英語教育を6年間受けました。週1時間しかない英会話のクラスでは日本語が飛び交って、oftenをオフトンと発音するオーストラリア出身の先生を「お布団」と揶揄したり、猥褻な単語を大声で読み上げて女性の外国人教師に質問する同級生がいたり、破天荒な学習環境でした。個人的に英語で一番好きだったのは日本人教師による文法と品詞分解の説明で、英文の構造を考えるのが好きでした。高校卒業まで、もちろん英語を話したこともなければ、洋楽や海外映画が好きということもなかったので、英語を意識して聞く機会には恵まれませんでした。同様に、最近よく言われる「生きた英語」とかいうのは知りませんでしたが、そもそも英語って生きてるんでしたっけ。

色んな成り行きで、高校を出てアメリカの大学に入ることになったのが自分にとっての転機だったのだと思います。渡米直後は当然周りが何を話しているかわかりませんでした。幸運だったのは、日本の教育のおかげで、ゆっくりでも辞書を使いながら、大学の理工系の教科書を読める英語力がそれなりに備わっていたことです。日本の高校の理工系の教育水準は悪くありませんので、最初の１年は新しいことを学んだと言うより、知っていた内容を英語でもう一度学び直す感じだったのですが、それが調整期間になって良かったと今では思います。立ち上がりに躓かず、大学で真面目に勉強をして、卒業後は大学院に入って博士号を取得し、アメリカで研究職として就職して、合計で14年住みました。

渡米後の「英語」の勉強については、最初の2ヶ月間語学学校に通ったのと、GREと呼ばれる大学院の入試の英語の勉強をした以外に何もしていません。アメリカ人が普段話す英語を聞けるようになるのに渡米後4～5年くらい、話せるようになるのに8～10年くらいかかりました。意識的な英語の勉強をしたらもっと早くできるようになったかはわかりません。ちなみに、現在でもラジオからかかる音楽の歌詞の全ては聞き取れませんし、新聞を読んでもわからない単語はたくさんあります。最近は英語の教養水準を高くしたいと思い、新聞を読んで解らない単語があったときに文脈で読み飛ばさず、きちんと意味を理解して覚えるように、意識的に「英語」の勉強を始めましたが、ここ1年くらいの話です。こと英語を学ぶことに関して、特別なことはしていませんので、特筆すべきこともありません。 アメリカに長期滞在している（特に博士課程、研究職の）友人はおそらく似た感じだろうと推測しています。20代も中盤になると、英語を英語として学べる時間は少なくなってきて、大体の場合、生活や仕事の一部として学んで行く形になるからです。

正直なことを言うと、私は英語関連のやり取りにあまり意味がないと思っています。大概のところ、経験に基づいた「英語の勉強の仕方」という「方法論」は偏見の寄せ集めで、体系化された「論」などから程遠いものです。少し毒づくなら、そのような程度のものを「論」と言って恥ずかしくない言葉のセンスや態度に違和感を禁じ得ませんし、そのような言葉の使い方をする人が、言葉の習得方法を話しても説得力を感じません。また、もちろん程度問題ですが、私は「英語よりも話す内容が大事」だと思っている古いタイプの人です。ですから、英語の勉強をする時間を取るよりも、自分の専門なり趣味なりを英語で勉強したり実践したりすることが良いのではないですか、という考えが根底にあるので、英語についてダラダラ話すのは、あまり生産的ではないとすら思っています。とはいえニュースレターへの寄稿ですので、数点、何か読者の役に立つことを書きたいというのも嘘のない気持ちです。下記、英語の学習に良い効果がありそうな心構えについて、 私見をつらつらと書いてみます。

1.学習にはそもそも時間がかかることを受け入れる

大前提として、物事を習得するのに時間がかかることを受け入れるようになると良いと思います。「中高6年も勉強して、英語が全く話せない」などと言うアホな識者がいますが、そもそも（中学高校の）6年間程度で何かできるようになるという前提自体、森羅万象の物事の深みに思いが及んでおらず、おこがましいのです。数学・理科を6年勉強したけど何もできない、って怒る人は聞いたことありませんし、スポーツだって楽器だって、プログラミング言語だって同じはずです。英語も同様で、「○○日でできる！」というような本が書店にあふれていますが、そのような宣伝文句に訴求されず、自分のライフワークとして少しずつ積み上げる態度を持つと楽になれます。このニュースレターの主な読者は20代前半くらいでしょうか。今日から10年間積み重ねれば、30代の中盤で、目に見える結果が出ると思います。

2.「学習方法」のせいにしない

言語学習の話になると、「日本の英語教育方法はダメ」など、学習方法に耳目が集まる気がするのですが、度が過ぎると滑稽にしか聞こえません。そもそも最適な方法というものは、各人のおかれた環境や条件によって刻一刻と変わっていくものですから、方法だけ変えても結果は望めないのです。また、他人が成功した方法を学ぶことに時間を割きすぎても意味がありません。例えば「モテる方法」を模索する際に、私が「V6の岡田くんがモテた方法」を学習し実践しても、微々たる成果も望めないのは火を見るより明らかです。私は永遠の０にも出演していませんし、彼と私では得意分野も違いますし、訴求力を持つ対象も違うでしょう。彼に関連した「モテる方法」は、彼の文脈に特化したもので、私には役に立たないかもしれないのです。私が岡田くんの真似をしてモテようとする滑稽さを理解できるなら、「方法」に過度にこだわる言語学習の滑稽さが伝わるのではないでしょうか。そんなことを気にするなら、下らないと揶揄される英文和訳をやりながらも、なぜ英文和訳が自分の文脈で役に立たないかを考え、そこから自分なりに工夫した方が、よほど有意義です。（余談ですが、私には英文和訳のプロセスは大変役に立ちました。それまでに海外経験のなかった私が、6年間日本で英語を学び、英語圏の大学に進学し、少し苦労したけど、滞りなく英語で書かれた大学レベルの教科書を読める素地ができていた。このレベルの英語教育のどこに問題があるのでしょうか。）もしあなたが英語ができないと嘆くなら、それは日本の教育方法に全ての責任があるのではなく、工夫して自分なりの方法を考えられない自分にも責任の一端はあるはずなのです。

3.言葉そのものに興味を持つ

「言葉に興味がある」ってのも抽象的なのですが、言語自体に興味を持っていることが、英語の学習を助けると思います。何も言語学者になれという話ではありませんが、学ぶ対象を好きになろう、興味を持とう、ということです。例えば私が「ああこの人日本語が上手い」と思う外国人を思い浮かべると、日本語の成り立ちなど、言葉の裏にあるストーリーが気になったりしてるようです。故事成語の成り立ちについて気にしてるだとか、漢字のでき方について興味を持っているとか（「木が2つで林、3つで森だから、4つでアマゾンだね」みたいなジョークを言えたりします）です。やはり言語習得は記憶と反復練習の単調作業が欠かせませんし、その過程ににストーリーや面白みを見い出して、興味を持てることは、継続にも有用なのかと思います。

4.英語を習得することを通じて、どうありたいか

これは私には一番大事なことかもしれません。つまるところ、やはり英語は道具であり何かをするために使うものですから、自分が何をしたいか、という意識を明確に持って、学習の方向性の指針とすると良いのではないかと思います。例えば、研究職を目指す私のケースでは、英語を使って学術論文の読み書きができるようになりたい、予算の申請書をかけるようになりたい、ジョークを交えた研究のプレゼンや質疑応答ができるようになりたい、などです。20代も中盤になると忙しくなってしまい、英語学習そのものに時間を割くのが難しくなるのは先に述べた通りで、大体がOJT（on-the-job training ）として経験を積む形で、英語を学ぶことになるでしょうか。だからこそ、自分が英語を使用してできるようになりたいものを明確にもって、それに繋がるような経験を積めると良いですね。学生として将来像を明確に描くのは難しいかもしれませんが、留学などを考えるときは、そんなことも少し頭の片隅に留めても良いかと思います。

以上、私が英語を学んだ過程で、感じたことをまとめました。最後に、禅問答的な言葉遊びをもって、筆をおきたいと思います。あなたがもし「自分はAさんより英語ができない」と引け目に感じてしまうなら、あなたはそもそもAさんの英語がどれくらい上手いかを判断する能力を有していません。これが示唆するのは、そもそも「自分の英語力は他人に遠く及ばない」という判断や劣等感が論理的に妥当であることはあり得ない、ということです。ですから、あなたは誰にも引け目を感じることなく、折れずに腐らずに、少しずつ学習を積み重ねれば良いのです。若い世代がゆっくり時間をかけて自信をつけていけることを、同じ過程を経た者として願っていますし、応援しています。

写真：サウジアラビア滞在中にセミナーで訪問したKAUSTのキャンパスにあるモスクです。

橋本 道尚

わが街・学科紹介：公衆衛生学とエモリー大学

Emory University
塩田 佳代子

私は小学生のころ南アフリカ共和国に住んでいました。アパルトヘイト廃止直後で、まだまだ差別が露骨だった時代でした。上下水道が整備されていない、家と呼べるか分からない建物が密集した地域がいたるところにあり、住む人も家畜も痩せ細っていました。日本しか知らなかった私にはこのことがとても衝撃的で、「人も動物も、みんな元気だったらいいのに」と当たり前のことを思いました。今思えば、それが全てのスタートでした。帰国後、人間と動物の間に立てる人になろうと決め、2012年の3月に獣医師免許を取得し、同年8月から公衆衛生学を勉強するためにアメリカに留学しました。今日はニュースレター初登場のエモリー大学と公衆衛生学修士プログラムについてご紹介させて頂きます。

エモリー大学

エモリー大学は、アメリカ南部、ジョージア州アトランタにある私立大学です。設立は1836年。規模はそれほど大きくなく、学部生は7600人、大学院生は6500人ほどで、アットホームな雰囲気が漂う大学です。医学、生物医学、公衆衛生学、MBAが有名で、研究者や学生が世界中から集まっています。今回はその中から、私の通う公衆衛生大学院を自分の体験を交えてご紹介します。

公衆衛生学修士号

公衆衛生学修士(Master of Public Health: MPH)とは、MBAなどと同様に専門職学位と呼ばれる学位です。集団の健康を分析し、その予防や改善に役立てることを目的に、疫学、統計学、環境医学、国際保健、医療政策などを学びます。米国のMPHプログラムは1~2年間で構成され、Ph.Dとは異なり、ほとんどの場合は延長することなく期間内に卒業できます。公衆衛生学では現場での経験が非常に重視されているため、ほとんどの大学で、プログラム中に公衆衛生分野の職業経験を積むことが卒業条件として要求されます。

Rollins School of Public Health

RollinsのMPHプログラムは通常2年で、一学年は全学科合わせて約500人という大所帯です。そのうち約20%が留学生で、中国、韓国、インド、サウジアラビア、アフリカ各国、東南アジア各国から学生が来ています。日本人は一学年平均0~2人ととてもマイナーです。エモリー大学全体で見ても日本人はとても少ないので、キャンパス内で日本語を耳にすることはほとんどありません。英語上達にはもってこいの環境かなと思いましたが、渡米後数ヶ月は日本語欠乏症に陥りひどい目に遭いました。

Rollinsの売りの一つはロケーションです。アトランタには、Centers for Disease Control and Prevention、Carter Center、American Cancer Societyなど、公衆衛生をリードする多くの機関が本部を置いています。Rollinsにはこれらの機関から講演者が毎日のように訪れ、現場での経験を踏まえて授業をしてくれます。共同研究も非常に活発で、これらの機関の研究プロジェクトに在学中から関わることができます。こういったネットワークは卒業後の就職にも有利です。

MPHの授業スタイル

近年は公衆衛生学を専攻できる大学も増えてきたようですが、ほとんどの学生はそれ以外の学科から公衆衛生大学院に進学します。化学、生物、数学などはもちろんですが、歴史や美術、コンピューター科学などから来ている学生もたくさんいます。そういった背景もあり、MPHプログラムでは公衆衛生学を基礎の基礎から教える必要があるため、授業数が多いです。1コマは1時間半~3時間で、それを一週間に9~11コマ履修します。それぞれの授業で文字通り山のような課題に埋もれるのは、皆さんご存知の通りです。中でも公衆衛生大学院の特徴は、多くの授業がグループワークを課してくることでしょうか。英語が得意でない留学生は、言わずもがな苦労します。私が初めてグループワークに参加したときは散々でした。他のメンバーが配布された資料を10秒程度で読み終えて意見を言い始める中、まだ始めの数行を読んでいた私は何の話をしているかも分からず、結局発言できたのは自己紹介の時くらいでした。授業は英語の上達を待ってくれないのだと、当然のことを痛感しました。

Rollinsでの研究生活

Rollinsでは研究も卒業するにあたって必須です。HIV/AIDSの研究で特に有名なRollinsですが、それ以外にも様々な疾患やトピックをカバーしています。学生は豊富な選択肢から研究テーマを選ぶことが可能で、多くの人が複数の研究プロジェクトに関わり経験を積んでいます。日本の主な大学のように、皆一斉に研究室配属が決まるわけではなく、それぞれのタイミングで研究を開始することができますが、逆に人気のプロジェクトは入学前から取り合いになります。私はマダガスカル島の人獣共通感染症のサーベイランスや、中国四川省のリアルタイム

Emory大学Rollins School of Public Healthのキャンパス

感染症届出システムを用いた疫学研究、その他5つのプロジェクトに関わる機会を頂きました。ラボ実験、統計解析、空間分析など、毎日手を替え品を替え研究に取り組んでいます。

サマープラクティカム

先ほど 述べたように、ほとんどの学校で現場経験は卒業条件の一つです。Rollinsでは、2年間のプログラムの間に200時間以上働かなければ学位をもらうことができません。Rollinsの学生は2学期が終わる5月半ばから8月まで、世界各国様々な場所でインターンをします。人気の高い国はアフリカ各国とインドです。私の場合は、様々な先生にご助力頂き、タイの世界保健機関カントリーオフィスにてインターンをさせて頂くことができました。感染症のサーベイランスやレギュレーションに関わる部門に所属し、様々なプロジェクトで勉強をさせて頂きました。たとえば、タイ東北部におけるレプトスピローシスの感染リスク低減プロジェクトでは、疾患に関する基礎知識を住民約7000人に提供し、農家の方々にはブーツを配布することで、感染症を地域全体で協力して予防することを促し、その効果をアンケートや血清陽性率に基づき統計的に評価しました。学校で学んだことを応用し、様々な分野の専門家たちと協力してプロジェクトを進めるのは、とても良い経験になりました。

塩田 佳代子
Emory University

6年生の学部から留学する人へ

医学部、薬学部、獣医学部など、6年制の大学から海外の大学に留学したい方は、出願の際に気をつけなくてはいけないことがいくつかあります。例えば、日本の医学部や獣医学部で与えられるBachelor of (Veterinary) Medicineという学位はアメリカには存在せず、これをどう扱うかがしばしば問題になります。オンライン出願フォームでは、リストにB.S.とB.A.しか選択肢がなく、どれを選べばいいやら困るときもあります。出願ギリギリでトラブルにならないよう、志望校のアドミッションオフィスや留学している先輩からアドバイスをもらうのを忘れないようにしてください。

公衆衛生や国際機関でのお仕事に興味がある方、6年制のプログラムから留学する予定の方、アメリカ南部での生活に関心のある方、いつでもご連絡ください。

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

【ニュースレター編集部】

原 健太郎　石原 圭祐　高野 陽平
山田 亜紀　辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

米国大学院学生会は2013年12月に全国8大学(理科大、大阪、早稲田、立命館、東京、九州、慶応、京都)冬の大学院留学説明会を行いました。今冬の説明会も開催校の関係者の皆様及び参加者の方々のご協力のおかげで無事幕を閉じる事ができました。この場を借りて感謝を申し上げます。今回は新しい会場での説明会の開催に加え、理科大学では2日間に渡っての説明会の開催、九州大学では2キャンパス同時中継での開催などより多くの方々に参加していただける形で説明会を行いました。また講演者の方々も米国だけではなく、イギリスからの講演者も多くお招きし、より広い形で英語圏の留学生の皆様の生の声をお伝えすることができたと感じております。（ニュースレター編集部）

今回京都に四泊程一時帰国しており、その際今月号の記事を執筆して頂いた関口さんと少しだけ会う事ができました。改めて米国大学院学生会・ニュースレター関連の方と直接会い、話し合う事ができ非常に嬉しく思っております。今後ともニュースレター読者の方々や、二年弱共に活動をしてきているニュースレター班のメンバーとも直接お会いしたいものです。（山田）